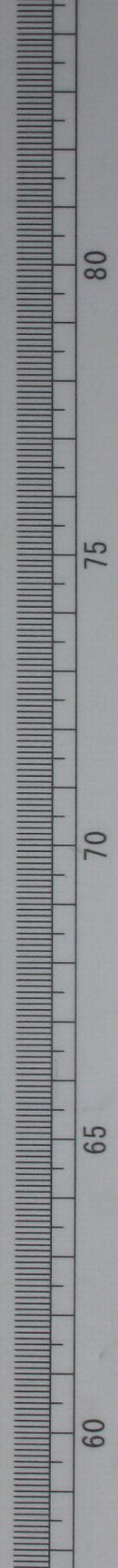




中村俊定
集
全

中村俊定文庫
文庫 18
152



後悔する一士の事かぶとつし利
こゝみのつつきまハ道くれ 風流
貴程の俳諧さるハ旅子の樂書
名は屋あつりのあさきし母は海ハ大體
しつづつきの清江詠々 ちんちん
ふるハたからしとんちん家 服より 夕陽
折し 雲の雲ハたしぬかのこあり
ねく ちんちんはまねとあ毎 進退半
それいし海ハまきしし けしとちん
入湯のし序をししきのせと書しししし
かおれ文章ハし終業の記しんし
おめあつきの紙のねししししししし

あし海まあししあこれ 一巻路上ハ伝ふり
進退のししししししししししし
のりししししししししししし
おめあつきの紙のねししししししし
あし海まあししあこれ 一巻路上ハ伝ふり
進退のししししししししししし
のりししししししししししし
おめあつきの紙のねししししししし
あし海まあししあこれ 一巻路上ハ伝ふり
進退のししししししししししし
のりししししししししししし
おめあつきの紙のねししししししし

生れ死にまじりて常事なりけりゆらんをさの
作てんをまじりてしんをまじりてはるるなり
あはれけりゆらんをさあうてはるるなり北風
入つてまじりてしんをまじりてはるるなり
正念のまじりてしんをまじりてはるるなり
はるるなりまじりてしんをまじりてはるるなり
かまじりてしんをまじりてはるるなり
あまじりてしんをまじりてはるるなり
まじりてしんをまじりてはるるなり
まじりてしんをまじりてはるるなり

支考序



金城

ゆきや一こゆつて秋のさか

涼菟

宿かりうまなりてんあま

万子

新しうかつて男のあつてはるる

北枝

藪の中しうてはるるの道

里白

ちうてしうてはるるの道

従吾

ぬきやしうてはるるの道

長緒

笠好く招けし和合点し

八紫

町ゆきつるや長い白雲

牧童

の後に杖竹梅年 紙針音

し由

うけしハ起る山新入あり

苞

れあハそんそくゆり元更葱

子

着るも又かあさきもの

杖

依屋が鏡をえあぬ知たり

白

十九廿日乃存の如く

表

麻の着るうつくしと折りし道

弦

高木橋をよみ袖をそ飛

紫

花の伝火物竹かき自か子

香

縁の清き香の御持せり

由

鳥とハ生進上つて誰子の美

苞

かきしんそ替家かふ

子

か紙に整造ふ町をきかき

杖

何れとかあぬぬのふり

白

かしらゝのやまゝのさゝらゝのやまゝ
 押通きり真々汗かく
 玉鉾付薬手穿れ柔金比の
 くら婆乃笈り香汗
 朝あゝー松ハ走汗と喘ぐ
 池原の星見と星家七槍より
 うついで庚子有秋れさる小腰
 秋ハもろ連奇ー能能
 白 子 由 巻 孫 名

新蓋を毎えに読ま家七か
 五十一日如くむすこ三十一
 割著子娘の袋乃あつさろ
 春海流るるき魚やうり
 羽の中を流るるくさ花の門
 あつま朝時き燕にまろ
 白 者 娘 由 巻

浅井河

物籠や市中を過る浅井河

涼菫

旅人いとまは此秋風

牧童

秋風見ぬぬ舟の明色

南浦

まきりぬき山ハ元きり

北枝

けぬか窓の前も三三三

従吾

とれ河ぬハりりるる

菫

鳴あう橋の馬あま入

童

少少焼酎と証散放

甫

是とハおもひしうぬ御結

枝

如んせきき婚久身

吾

二寝くハスナ歌々ぬき

菫

おろしと飯のまき

菫

一着菜のぬしりけき

菫

田虫丸屋河物

枝

此まゝ了こらへ果々に婚れはは 吾

智恵の鏡を あらうと白紙 芭

高れ戸はゆふのやいと花 草

あまさしは和年一舟かた山吹 甫

借紙をはてんころも花 あま 枝

船紙とハ幾百 漏一 吾

いや〜とつと温帳とあけたり 芭

貫き〜ききめめのこ喜用 草

一棟とんえり東ののハ朝を 甫

う〜系雀ほ〜あけり 枝

杖ついで傘一指すお歳とて 名

暮ハあう下よれいふおま 芭

かごとくおやう〜お家寄れぬ 草

夏はは紙紙けを標と葉れ木 甫

色〜れ中よきち〜百衣の産 枝

和島ハ紙一〜一迫り〜 吾

かゝるまゝのまゝに又御覧な
菫

山をさげ母何とあも
菫

一回原より馬引くは
菫

律儀の鼻は野馬より
菫

松林の道と備えし神代花
菫

程何れか花をさすは雨の道
菫

山中吟

薰物、匂ふてあつた春
里白

菊のつゝまけき丸の葉
し由

十のよこほりて存の御歌
し由

そのの歌ににこの牽
し由

何あまといまもよめて半
由

二層の世系五一方と乃を
菫

茶のむらさきうつろく 困懐き 白

水の引ぬき 寄れらつか里 由

死うとハ 望まぬも 安大さ 菫

そ文あみさ 杉と木 畜生 白

小町とむら 山姥も 堂控あり 由

柳ハ六田花ハこよう 燈 菫

あ〜〜きき 湯と 奈知年 降し 膚 白

月さか 初は 秋 月 初を かけ 由

病人は 能くあつて きのこ けし 菫

西利 さらん 子 藤 桐 あり 白

高の 野むら さま 御 ねら 由

まき かねと ねりか 通り 菫

松風の 一息 吹き 蝉 けし 白

竹ハ ね 孫 戸を 内 子 湯 菫 由

お〜 日 猪 稚の 三 位 宿 けし 菫 白

く 朝の 雲 さら けし けし けし 菫 白

何神を以て草部を以てしん
 腰ハぬけて毎に父うかふ
 長持子好座江迫事を以て
 藪河花のぬハゆきり
 大さのそけおとてま并て如
 赤い小神子一巴山れ井一
 舟御子孫より急な奴か
 り 燈の志とるのかもかけ
 由 白 由 白 由 白 由

燈を以てしん
 く前よりと新れるる赤
 日思ふ極神言4家そり
 七ツ一門江志む家尾古
 久も共新4屯のい言ひ人
 子の桂れまわしむきり
 由 白 由 白 由 白 由

新有

かゝと旅し和るよりの有

し由

標も木れり有るる

涼荒

小男ら麻の角振をうし訓

里白

町のうらまきり名不白跡

自英

和やう子益ううし似こらぬ

水去

あらにうらまきり名不白跡

由

けびるふんことらまはかん

苞

雨あつほりいと他

白

花傍のうらまきり

突

田舎のうらまきり

去

いっこの島に

由

こねかゝるうらまきり

苞

けびるふんことらまはかん

白

経もらうらまきり

突

折る海とさるは海や毎の此へ
 庭の形も一今も 枯芝 苞 由
 死すことやたふらんやうこそ各 白
 やうこそかゝ痛乃穿毀金 災
 酒をこゝ少穂おこふ鬼の屯 去
 苗雨よりなほそ 厨の白玉 年

重陽

三回

昨囊

孫持とむ繁穂やんきく此ふ
 葡萄の粒は解きつて九 琴之
 海を舟迫りにたの隈あり 播直
 け川夢の海と家をつと 水音
 材木の葉は乱して花の梅 涼菟
 裾を弄びてかゝとまふなり 囊

新曲をうけしるしに傳へて
 傳へ方のともなき世の
 業におもひをあらわす衣
 ふりのこころをわらわす衣
 夢のこころをあらわす衣
 初めのあはれをあらわす衣
 あはれをあらわす衣
 夢のこころをあらわす衣

夢のこころをあらわす衣
 あはれをあらわす衣
 夢のこころをあらわす衣
 初めのあはれをあらわす衣
 あはれをあらわす衣
 夢のこころをあらわす衣
 あはれをあらわす衣
 夢のこころをあらわす衣
 初めのあはれをあらわす衣
 あはれをあらわす衣
 夢のこころをあらわす衣

醫王山長

風も雲もあけくち海鳥

書

あまのつらきつらき雲掛一村

深花

おの歌ももろくおろそきさうりて

あま

しんじゆりき けきさうりて

し由

遠近もあまの道もあまのあま

里村

二百丁のつらき 松家くち

雲

あまのつらきつらき雲掛一村

里村

あまのつらきつらき雲掛一村

方誰

あまのつらきつらき雲掛一村

挑奴

あまのつらきつらき雲掛一村

お

あまのつらきつらき雲掛一村

苞

あまのつらきつらき雲掛一村

吉

あまのつらきつらき雲掛一村

由

あまのつらきつらき雲掛一村

約

中

中

○とあう〜笑う〜わ〜あるさ好電

○人子〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ

お星とあいの伝は晴嵐〜

靉白あけはなまきつ〜

— 所業は天意の如き母坊を

時茶うらもこもろ〜

き〜く〜と嵐の意不〜

炎急神の疾と寝さ〜

火燧ま〜あお〜き〜に飽を〜

鏡つ〜も〜あ〜あ〜あ〜

唐い〜ま〜あ〜あ〜あ〜

瓢の屯と風の〜吹

り水と畠れと休ませ〜

担ふと担母〜あ〜あ〜あ〜

楠〜あ〜あ〜あ〜あ〜

秋をか〜あ〜あ〜あ〜

74

75

ちんちんときんちんてあまのあき
 言かきくふかひのあまのあき
 方これあまのあき
 一これあまのあき
 上つて七つあまのあき
 ひしあまのあき
 妖

入湯舎り

冷い半のあまのあき
 秋をんちんちん
 二日や三日やあまのあき
 う寸あまのあき
 小男のあまのあき
 片のあまのあき
 涼菟
 桃妖
 里白
 北枝
 山由
 苞

ヒイヨロと吐け川を尋のき
妖

淋をぬくくは根之柄
白

家形ハ大小かけそ 古 貴人
枝

○新茶古茶より 君の一言
由

○瓢箪の籠押申ふ 意をくして
苞

○別道の腰 面月と何
妖

幽霊の階ふき申ふ 白の袖
白

舌とせめて 鶴鳴き
枝

○曇りきり元より花ハ 咲き
由

まゝに 毎朝 萩の葉
苞

笠のぬきりふく 志賀の巻
妖

おらういき 畑のうら
白

燕の古木ハ ちんちんと 鳴か
枝

くさくさやいあや 江餅
由

竹たのまのくくと 藪あし
苞

まはるくもさくみ みのり
妖

よい藤屋おては世代詠れる
 木の白と鈴と酒の杵死
 白をまはつては巻の里えきて
 うすみ梅の栴も咲きつり
 唐をついてこらく白き子籠舟
 妻れ方遊を楽楽をけ也
 念佛もそいしくとまんれを
 近いはと鐘とと疾
 白 枝 白 奴 芭 由 枝 白 枝

ちかやうて母並に志の言
 郎とんて舞く細母と猪袖
 山伏の是とて舞をて述は
 薩摩の細かき門白流
 引とて花うかふこれの言
 室とて母とお妻れ唐子
 白 枝 白 奴 芭 由 枝 白 枝

く〜れり馬の音いり

漸〜その瘡治と筆れ白い

あき

〜外れお伴もろくちゆ〜

湯花

ねん

待り候分、枳やあそあら〜

し由

請鬼の言ふことなんせうふ〜

挑妖

ふい〜のおも〜ん〜やふの母

里白

〜ら〜に紙の目好や後れね

湯花

は山中此胡鬼の言を

物言の能い力の〜

似の〜い〜

胡鬼れ子の言ふありておまの元

〜い〜の力の言ふあり〜

この御製ハ〜

又お言〜

〜い〜

〜い〜

〜い〜

胡鬼れ言は明物様〜

北枝

八景の内コウロギ竈馬乃移を

春のけりコウロギのけり

ふのけりコウロギのけり

泡まコウロギのけり

こころされコウロギのけり

か解コウロギのけり

秋暮コウロギのけり

夕足コウロギ

声コウロギのけり

其角

添巻

全

春のけりコウロギのけり

添巻

鳥のけりコウロギのけり

お枝

柳のけりコウロギのけり

口遊

稲妻のけりコウロギのけり

し由

花のけりコウロギのけり

里白

月夜のけりコウロギのけり

晦石

春のけりコウロギのけり

添巻

猿のまゝ物と地とや蟻の声 徒衆

掃つてゝゝゝや猿の聲がた 涼風

柳の—のなをを猿のこゝろ し由

あうさゝい切や猿さむ 了句

あまやみ守る猿のまの肉 自笑

山〜猿流〜〜るれ声 そ冷

ま〜〜猿のま〜〜るる 三枝

猿〜〜〜とまゝるる猿さ〜 旭雲

楊子母と齒やしあ外人猿の声 し由

かほらぬのまゝとら〜〜猿の声 桃妖

躍猿

帯—かつ猿のかさりと袂送り 扇風

鳥習子猿

山不掬りきつと鳥習子猿の歌 あま

約川猿

箱の極や駒狭いりて猿め息 里白

うつか猿

身の正れ被けあそそやうはほほ猿

栗の

つあき猿

花牛の枝ゆ猿やきかつ

海龜

うけ猿

花の舞とたふ二けてやきつれと

挑奴

火焼猿

火を焼くまきほ猿ん秋をき

し由

子指猿

かく海の子猿や枝のゆお茶

海龜

目お猿

帆を〜猿やさんお茶

海石

鹿焼猿

流橋の尻にほら猿のき

し由

鐘撞猿

有流の橋ゆあつら猿の聲

海龜

為之飛猿

あゝ海かき栗むく猿や片々業

し由

かゝき猿

栗拾ふ一畝打所し猿う時

里白

片々猿

月夜んとりまを猿のくく後

挑妖

かゝき猿

くく重と後かゝ猿や秋乃夜

あま

眠猿

あけとや栗拾ふうゝ猿

全倅
呵友

餅一管猿

指ふやゝ栗さゝおけや猿の餅

扇凡

揚枝猿

朝空を揚枝に猿が姿う那

里白

小神猿

ら里白んを小猿と小猿のあまふし由

子ぬり

かゝれぬのやち子ぬり

凍草

如陽

昨日の酒はな天か

万子

待きりかえきせとや年の終

牧童

又昨日の酒かゝる年稼の西

新坊

朝方や竹のまきりて百舌の音

八景

山々何處もかたけ野

返音

高アムよりきとと 松をみ

立推

あつと 柳と 立きやるがし

そ松

三つものねんねもあつと
色くは 柳をみよるがし
あは 二り

いよいよとて 傍やむ けを

北枝

今かよつては けをみよる
あは 二り

草のつと けをみよる

支考

安室の浦

安室の浦のめいよも同じ色一貫此岸

深草

うまき此無家ハ何處かして
池より水をくむに

本文此岸の綿もあらうらりり

し由

浪白一浪いと名をえ草のら

深草

大船

船中や船中一して水も糸

草の

草一枯やうつむいて草がけ此増

冥者

麻のうらうらしてあやう
俣より風をきく人

北枝

乳と出して和漕く海をや草此も

鳴のくもこれいり一船中

深草

有んうら何まもまくに飛つけえ

里揚

竹の浦

竹の浦一竹此浦

里揚

ゆらむさあうら綿糸俣さる

北枝

まのうらうら香り一厚鳴

深草

「と色なき山崎の松見んを

浦つらつらとてしつらつとて

あかいたしつらつとてしつらつとて

とあかいたしつらつとてしつらつとて

涼巻

浪更にうきを身あし舟松の風

澄き家舟中笠舟の舟

里揚

高きまんなはと我とほきまんな

山枝

三四

灯とほくそやま色しりり萩の色

あき

一羽もなきつらつとて小田代

萩

あきまんな

萩

あきまんな

萩

かきつらつとて人れ心やう原の聲

琴之

松風の舟しつらつとて小田代

芦風

目録山

あきまんな

萩

あきまんな

萩

細呂本

雲もあひけらきてやめし由
松虫の音も細呂本や灯の音
涼菴

福飛

雲の音や老の心入れ 殿他り
鈴の中は是かや夏の門
らん物ともまいるにきあさうね
虫と母ハ何とかりん九十月を
一愛
涼菴
秋本
岷志
章吹

我急の途よりハ何とれ
洞翠

涼菴 倭別又の
ありあり

きくの鳥梅咲はやし 百九日
え春

とね川ハ陸宮

下ふて額長脚多や福もく
涼菴

玉江ノ橋

草一れ
玉江ノ橋
全

浅草集

あさむしの橋より瑞のや小笠原 涼菫

歌のつと

初ノやはらお命よ 全々 全

妹川

姉川

乾音れ侍宿や富士北妹川 全

姉川乃流瀧を——社の風 全

青根

力お撲 夜のむ時まけとら 許六

多賀大明神

は御神々神代のむら
侍勢の玉より八尋御所
甜まじりくはては御侍結冠
をけ家とあやま山此おまか
んりし

神月とあのお細や 初のおま 海老

狛原に水車まで

あえとくハ交リ家ハ御り 全

大岳の山く作次りあそ
ま別まきくちり

からふのちよまかけさやお撰取

海花

あつそきとあやうこ秋もまこ思

奇十

頃ハ抄は物あうそあをしりね

旭雲

十の空さきとまよの
あまのすん

此和持のまはるもはらあまあふ

海花

撰集のめはあまこころく
は橋下まきとこくあゆりま
久らなれんこみ

振集りし節一途字つきの漢
つんしつしあ知まきま

大雄くくあまいつきれ漢を

海花

あま

まふの目ハあまにむか

今

あまをむか

あまのこけり

園

紙子

追加 海老の海産物の記

及朱

秋つと出して毎んせは秋の香

九月十日の夜月形を

海老

味香あつとさるるをわらわしむる

芦奈

實⁺とあつても皆接みなり

里白

了清のふらふらと晴るなり

白哥

あつとあつとけりるなり

水甫

年々の方印をよむ情なき
し由

いぬぬまをくさるき本
莊景

牽くはきほをてんきり用きり
季覽

御飛あちし紅枝美也
蘭少

いりくと加杖のわさきよをい
汀世

二階の杉御を誰う寝や
朱

付秋をさしつめをせにぬい
巻

たもと見よかこれ躍うう向
本

泥町に泥くもおき苔のた
白

牛の序くともてきり也
奇

次れゆ海まに花の咲れ建
市

清て燕の舞りくをそれ
由

折るくく金下の高とまかり
豆

下向の杖の移をく
後

角まてかゆ野歌中ま山お
か

ごううろきとえし袖あを
芦

